

# 農民組織をめぐる二、三 の問題点

佐藤 勉

農民組織が何を意味するのであるかが必ずしも明らかでないにしても、もつとも広い用法では、農民が主体的に参加し、構成しているあらゆる組織集団がふくまれるであろうしかなり限定的な用法では、既存の構造に対して反動的、反対的な組織を、意味しているようである（この場合、集団と区別される組織の意味が明らかになる必要がある。）そして、従来の農民組織を、広義のそのなかで捉えてゆくという路線が、かなり有力な接近姿勢として考えられていると思われる。このためには、単なる用語の検討ではなく、当然のことながら、村落構造の捉え方における基本的枠組と、農民組織の分析視角の基本要件とを明らかにすることが必要である。

(1) 新らしい農民組織なり、新機能集団なりが問題にされるのは、いわば伝統的を歴史枠組によつて処理しえない側面が出て来ているからにほかならない。既存の構造は要因が変化し動揺し、そこに新らしい側面が形成されてゆく。このばあい、単に原形の変容と見

境とを問題にするのではなく、新らしい構造論を明らかにする必要がある。この新らしいモデルは、まず第一に、産業社会の根本的特性である経済合理性の、村落生活におけるほどこかの貫徹を説明しうるものでなければならぬ。産業化、都市化、あるいは官僚制化として捉えられる一連の変動過程は、社会関係の更なる結合様式の典型として「経済集団の結合」をもたらし、新らしい構造化のモデルは、機能集団的社会関係のなかで典型的にみられる「競争の論理」とでもいうべきものによつて特徴づけられる。社会的現実の各側面をいし社会関係の型における、このよりな変化は、いりまでもなく基本的な役割行主体者としての家族の変、を前提としている。いわば、家連合における関連づけの契機として機能集団の結合が効果的に作用している点に、このモデルの戦略的価値があるといえる。

(2) かりに村落とは、職業をいとなむ人々の間に、生活と生産の場である家族を拠点として、主な生活技能を包括的に充足する一定の範囲において形成される社会システムであるといえらるれば、村落構造の分析枠組は、一定の地域が環境的になりうる諸条件の分析と、そのうえで展開される社会関係システムの分析とを中心とするものでなければならぬ。このばあい、一定の地域が準拠枠になりうるのは、それが生活過程において、一定の

構造的に重要な基準を作りあげているからである。そして社会学の対象把握の特性が、全体論的理解にあるとすれば、村落を理解する場合には、全体社会の基本的な枠組としての体制と、さまざまなレベルにおける地域社会と、それらの内部におけるさまざまな諸集団と、さらには構成メンバーの態度・意識といつたように、体制から、小集団はいかに及ばず、成員のパーソナリティにいれたるまでの、社会構造的に、パントな諸要因を考慮に入れなければならぬ。これは、分析枠組の最大限の範囲なのであつて、分析の焦点はあくまでも村落それ自体の機能と構造の把握にあることはいりまでもない。現在のところ、われわれの手にとどく分析枠組は、村落内の社会関係を、経済関係や政治関係をふくむ、広い社会関係として理解し、たとえば、村落内の生産関係を、ほかの社会関係との関連において理解することを主眼とするものである。しかし、村落構造をインターナルに捉えることを主な内容とするものではないかと考えられる。

(3) 農民組織は、形論的には農民の組織一般をさす。しかし問題とされる「農民組織」は体制の側での構造変化に対する農民の対応なしいし適応における農民の組織化をいみすることが多い。このばあい、理論的にも、具体的にも、さまざまな組織化過程が考えられるのであるが、それらけすてに経済をいし政治へ

権力)の次元における組織化を中心としている。この二つの側面は、体制側からのコントロールが強い。みち、この二つの側面は、体制とか制度といわれるものとの直接的関連をしない存在しえない点で、本来的に外部的なものに規定されている。しかし逆に、政治の次元ではいわゆる反体制的な組織化がみられることにもなる。そして、これらの二つの側面が現実には組織化され、機能するのは、生者行為主体者としての農村家族と個々の成員が取り結んでいる。インターナルな、あるいはインフォーマルな、社会関係の、いわば生きている現実態との接点においてのみである。この点において、塚本勲教授によつて久しく唱えられているところの、行動科学的理解を、体系的に展開する必要がある。たとえば、しばしば引用されるホマンズ・モデルなどの、もう少し組織的な撰取が考えられてよい。もつとも、このような行動科学的発想にたつと共、マクロな構造原理としての階級的、社会運動的視察にたたいと、木をみて森を失なりむそれがあることとわらるまでもない。